



中野香織
(服飾史家)

「絵画的」で 「リアル」な映画 目まがいがるほど



絵画のなかの人物が衣擦れの音をたてて歩きます。

これまで何度も夢想してきたその情景がついに眼前に繰り広げられた瞬間の感激ときたら！18世紀のイメージといえどもに絵画や小説描写をたよりに紡ぎあげるのが精一杯だった服飾史研究者にとっては、絵画を舞台に人物が動くというこの映画は、絵画を見ながら思い描いてきたイメージそのまんまという点で、既製のどんな18世紀コスプレ映画よりも「リアル」である。絵画から情景が動き出すばかりではない。情景がときどき見覚えのある絵画になったりもする。シュミーズを着たグレースがシャンス侯爵をベッドに隠し、半身を起こして巡視隊に対応する姿は、ダヴィッドの描く「レカミエ夫人の肖像」を思い出させるし、サッシュベルトを巻いてモスリンのバフスリーブ・ドレスを着たムードンでのグレースの姿は、ヴィジェルブランの描く「シュミーズ・ドレスを着たマリ＝アントワネット」の肖像と重なる。目まがいがるほど「絵画的」な映画である。

コスチュームはすべて手縫いで再現されたとあって、くるくると着替えられるそれらを見るだけでも眼福を味わえる。しかし、もちろんただ無意味に着替えられているわけではない。政治史上のみならず服飾史上でも最も激しい変化を経験したこの数年間における、人物の立場の変化をもかなり正確に反映させている。とりわけオルレアン公フィリップが着る衣装にそれが読み取れる。

まず、革命1周年の1790年に着ている縞柄の上着。『悪魔の布：縞模様の歴史』を書いたミシェル・バストローによれば、1789年以降、フランスでは縞柄は愛国主義理念の象徴となっていく。労働者階級のお仕着せの縞柄、バスチュー監獄の牢獄の格子など、バストローはさまざまな類比を挙げているが、ひとつの時代から別の時代へ移行する中間ゾーン（横断歩道がこれ）としての縞柄、という説明を私は気に入っている。いずれにせよロベスピエールは縞のフロックコートを着て肖像画を描かせており（映画のなかのロベスピエールはベストが縞柄）、この時点でのオルレアン公の縞柄のコートにも「フィリップ・エガリテ」なる市民意識が表明されているわけである。

そして1792年に着る、乗馬服のようなウールのカッタウェイ・コート（前裾を切り落とした上着）。イギリスのカントリー・ジェントルマンに倣った服だ。そもそもフランスでのアングロマニア（イギリス趣味）の嵐は1770年代から

吹き荒れており、反宮廷派でファッション・リーダーであったオルレアン公は1780年代にはイギリスの流行の伝道者ではあった。彼同様、快楽主義者だったプリンス・オブ・ウェールズ（後のジョージ4世で、本作のヒロイン、グレース・エリオットの元愛人）と親交を深め、キャンブルや競馬を通じた社交をフランスに広め、イギリス風のスポーティーな服を積極的に着ることで、反宮廷のポーズを誇示していたわけである。が、共和制宣言が発表されるこの頃には、イギリス風乗馬服はさらなる政治的意味を帯びる。なんとといってもサテンやベルベットのジュストコール（宮廷で着られたリッチな上着）では貴族の目印となって処刑台に送られかねない。それに代わる、敬意を表される服といえば、当時のフランス貴族から見れば理想に見えたであろうイギリスの支配階級、カントリー・ジェントルマンの服をおいてほかにないのである。素材がウール、色が地味なこの服は、どこに敵がいるかわからない環境の中で、とりあえず目立ちすぎることなくやり過ごすにも都合がよかったのかもしれない（この性質が現在の男性のスーツにもかすかに受け継がれていることは、言うまでもない）。

もうひとつ、反乱の疑いをかけられ、監視委員会から出てくるオルレアン公が着るケープつきの外套。“*Fashion in the French Revolution*”の著者アイリーン・リベイロによれば、旧体制の保守派の神経を最も逆なでしたのが、ほかならぬこの「ケープつきのイングリッシュ・グレートコート」なのである。フランス的（＝宮廷的）エレガンスの対極にあるコート、というわけらしい。つまりオルレアン公は宮廷人に最も嫌われたこのコートを監視委員たちの前に着ていくことによって、身の潔白を示そうとしたわけである。

などなどと読み込む楽しみは尽きないコスチュームなのだが、ひとつだけ不満がある。男性の膝から下があまりはっきりと映されなかったことだ。この革命期における服飾史上の決定的な変化は、実は男性の膝下なのである。キュロット（宮廷ではかかれた半ズボン）を亡命貴族狩りの目印にしたサン＝キュロット（長ズボン）派のことはボワリーの絵によっても広く知られているが、革命のさなかであって、いったい男性たちの膝下は、そして靴は、どう変わっていったのか？ せっかくここまでコスチュームに凝ったのだから、そこでもっと「リアル」に見せてほしかった。ま、現代の観客にはシルクの靴を痛々しくぬぐグレースの足は眼福になっても、男の脚なんて見たくもないか。